

❖ 自らを越えて

❖ 多谷 昇太

(四) 悪夢

(※お断わり…第三章の「悪夢」と重なりますが本来第三章は「黒い霧」とすべきでした。訂正が効きませんので、読者に置かれましてはそのように置き替えの程をお願い申し上げます)

高校二年の終り頃になるとさすがの俺も黒い霧云々などとは云っておれなくなつた。ナツシング・トゥ・ドウの「怠りのベール」に惰眠を食ふことも最早ならず、またかの算命占星学で云う風閣星のノンビリ性を腹に持つ(※「胸に抱く」ではなく「腹に持つ」。なぜなら人体星図の胸の主星は「龍高星・放浪とさすらいの星」だったのであり、腹部の従星が「風閣星」だったから。しかもこの星は俺の人体星図の他の箇所にもう一つ出ている、意味するところは相当のノンビリ屋で、大まかな神経の持ち主ということになる。女優の左幸子がこの星を主星の胸に抱く)俺であっても、将来の進路を明確にせねばならなくなつて来た。進学か就職か、前者なら国公立か私立か…尤も我が家は裕

福ではなく私立は元よりダメ、すれば就職か国公立となるのだが、大手トラックメーカーの運転手として俺や姉を育ててくれた親父が、どうしても俺を大学に行かせたがっていたのだ。自らは此れと云う学歴がなく、その面で辛酸を舐めた経験からも、また島の親戚連中に自慢したいということもあつたのである。しかしそれだつたら俺なんぞよりは遙かに優秀だつた姉をこそ進学させるべきだつたのだが、如何せん此方では至つて古い考えの持ち主で、女に教育は必要ないの一点張りで譲らないのだった。然るべき時期に姉が一度親父とやり合つたことがある。すなわち中学時に担任の先生から「是非に」と勧められた県立川崎高校への進学を姉が希望するのに、父は商業高校への進学とその後の就職を命令して譲らなかつた。俺の目の前で二人は激しく遣り合い、父から叩かれても姉は泣きながら食いがつたのだが、父から叩かれても姉は泣きながら食入れられていれば姉の能力・資質から見れば女の人生は大きく違つたものとなつていただろう。その当時奇しくも姉は俺にこう云つたものである。「建三郎、お前が女に生まれればよかつたんだ。おとなしくつてケンカひとつ出来やしないんだから…。ああ、あたしが男

として生まれていたら！あたしとお前で、神様がきつと男と女を間違えたのよ！」と。そう云われても一言もなかったのだが、しかし、はて、万能の神に於かれては、万に一つでも間違われることなどあるのだろうか？

とにかく、例の、受験勉強にはまったく用をなさない図書館通いも含めて一切を改めるべく、俺は明日と明後日が日・祝の連休となっていたので、この二日間を利用して一大禊を敢行すべく、丹沢登山を思い立ったのである。九月も下旬の頃であった。この丹沢への登山は高校生になってから始めたもので、きっかけはやはり図書館だった。中原図書館ではなく県立紅葉坂図書館の方。中学校の社会見学で同図書館と隣接していたプラネタリウムを訪れた際に知ったこの図書館は、以後俺の大のお気に入りスポットとなり、日・祭日などを利用しては時折りでも通っていたのである。この旧館2Fにあった旅行・地理コーナーで丹沢登山や富士登山の魅力を知り、以後前者を敢行するようになっていた（富士登山の方は往時は確かまだ1回だけ）。馬鹿とヤギは高い所が好きなどと巷で云われるが俺もその口だ。但しいかなる馬鹿なのかは往時は知らず、



【神奈川県立紅葉坂図書館】

またその馬鹿さ加減に果てしはなかったということもやはり知らずにいたのである。とにかく、小中学生時の県立川崎図書館とも合わせて、この二つの県立図書館は、俺にとつては夢と知識を育むワンダーワールドそのものに他ならなかった。シートン動物記や十五少年漂流記から始まってランボウの詩と放浪に至るまで、そのすべてを此処で夢体験し、それゆえ俺の原質は間違いなくこれら図書館で醸成されたものと云えるだろう。尤も真の原質は幼児期における奄美大島での体験にあることは前に述べた。

ところでここで些か俺の奇妙な性癖について一言述べたいのだが、こういう風に自分の素行を改める上において何かの名案を思いついた時、その思い付いたということだけで満足してしまい、その効果を過信し、恰も事が成ったかのように錯覚してしまうところがあつた。それでもそれを実行するならまだしもその名案を大事にする余りなかなか敢行せず、いろいろと脇道、横道に逸れては躊躇し続けてしまう……という悪癖があつた。これは思うに万一この素行改めなる名案を実行しても、もし何の効果が得られなかったら……と恐れる気持ちが強いのだろう。挙句、名案もその実行も、う

やむやの内に雲散霧消してしまうケースがしばしばあった。中学校時の担任の教師から「意志薄弱のきらいがある」と指摘されたことがいつまでも忘れられない。しかし今回はそんな躊躇癖をすっ飛ばしてしまうほどの強烈な恐怖の体験をしたのだった。体験と云つても現実ではなく、夢の中、なかんづく悪夢の中でのことだった。登山敢行を前に例によつてうじうじと躊躇気味になつていたある晩のこと、俺は恐怖ではあつたが明らかに啓示夢と思われる、実にインパクトのある悪夢を見た。では次にそれを記そう。

宵闇迫る学校の廊下を歩いて行く。そこは四階で右手に窓が続き左に教室が連なっている。その一室に入るとそこは俺の教室で中には二人の女子生徒がいて、ヒソヒソ声で何かを話している。一人は田辺という子でコケティッシュで可愛い顔をした、普段から陽気で明るい生徒、いま一人は矢内という理的でどこかすました感のある生徒だった。因みに俺はこの性格からして田辺さんに引かれていたが元よりそれをおくびにも顔に出しはしなかった。矢内さんの方はいつも俺の孤独ぶりを馬鹿にしたような『この、見つともない子』と云わんばかりの（彼女に限らず誰でも皆そうだった

【孤独、勇気のない、自らに強いそれは…すなわち、死】



が) 故意的な冷笑と一瞥を俺に送っていた。方やには引かれ、方やには反発していたがどちらにしても俺にとつてはインパクトがあつて、畢竟それが彼女らがこの夢の中に現れた理由だつたらう。俺は素知らぬ顔で自分の席に向かおうとしたがふと二人が立つ脇の机に置かれた花瓶の花に目を引かれた。その席は教室のほぼ中央、前から四列目に当たる新河という名の男子生徒の席で、この生徒に対しては俺には特別な因縁があつた。どういふことかと云うと、例の花田との一件の後ほぼ今のこの「完全孤独」状態に陥っていた俺ではあつたが、それでもまだ誰でもないから、誰か話し相手が欲しい、矢内さんの俺評ではないがこの見つともない状態を軽減してくれるような、適当な男子生徒を探し求めていたのである。それをするに当たつては花田一派のような「異人種」はもう懲り懲り、俺と似たような感じの、大人しくて目立たない生徒に、即ち新河に白羽の矢を立てたのだつた。あたかもお互いの傷の舐め合いを申し出るように、なにさわりないことを話題にして俺はおずおずと彼に話しかけた。しかし豈図らんや新河の反応は至つて素っ気なく、けんもほろろという感じ。意外感を隠しようもない顔付きを丸

自らを越えて

出しにして、俺はなおも話しかけたがその俺の言葉などまったく耳を貸さずに（その時何を語りかけたのかまったく覚えていないし、第一思い出したくもない）、「見つともないぞ」という一言をいきなり俺にぶつけて来たのだった。俺は一瞬開いた口がふさがらないという風情で彼を見返し、そしてうろたえた。内向的でそれゆえ互いに皆から疎外される者同士と勝手に思い込んで話しかけたのに、またそれへきつと好意をもつて返してくれるに違いないと確信していたのに、それがこの始末だ。廻りの数名の生徒たちにも目撃されただろうし、結局俺は花田の時と同様にそそくさと口をつぐんでその場から立ち去らざるを得なかった。有り体に云うが実はこの新河の態度と言葉の方が花田の揶揄いよりもグツと俺には身に伝えた。敢て云えばとどめと云うか、完全無欠のロックンローラーならぬ完全無欠の孤独男へとそれが変身せしめたのである。人間不信へのそれが完璧な誘いとなった次第……。

さて話を戻すがその新河の机の上に飾られたこの花瓶の白い花はいったい何なのか。俺の無言の視線に答えるように田辺さんが説明をしてくれる。「新河君、亡くなったのよ。自殺して……」。えっ？とばかり驚く俺に

彼女は持ち前の明るくコケティッシュな口調で「前からお腹の具合が悪かったそうなの。そこへ来て急激な腹痛を催して、医者にかかったんだけど……もう手遅れだったんですって」と場違いな微笑みを浮かべながら聞かせてくれ、さらに「それでそれを悲観してあの子……お家で首を吊ったんですって」とさらりと云い、そのあと矢内さんと口を揃えて「ね」とうなずき合った。

その上あるうことか二人して失笑さえもしてみせる。俺にはその二人の態度が信じられなかったがしかしのみならず、彼女らはそのまま摩訶不思議なる視線をじつと俺に注ぎ始めた。そう、ちようどそれは『でもこれって村田君、新河君だけのことかしら？ひよつとしてこれ（自殺）は……本当は新河君じゃなくって……』とでも言外に伝えているが、いや脅しているがごとし。その視線に腹が立つと云うか恐怖すると云うかたじろぐ俺を残して、彼女らはそのままスツと煙のように消えてしまった。現（うつつ）ならアツと驚く超常現象なのだがこの夢の世界にあつてはそうでもない。彼女らは偶さかこの俺という根暗生徒を揶揄うというか諷めるためにこの場に来たのであり、用が済めばこんな所は御免とばかりにさっさと彼女らの属する健康

な、明るい世界へと戻って行ってしまったのだ。そのことが夢というこの四次元世界にあっては容易に感得されるのが不思議である。因みにこの田辺という女子生徒は現実には俺のこの見つともない孤独ぶりを哀れんでか、時折りでも俺に話しかけてくれていたのだった。それなのに俺は皆の目を気にする余りそれを恥ずかしがって満足に受け答え出来ず、彼女の好意を踏みにじっていたのである。遙かのちの今の俺にして思えば、冷たい新河などよりはよほど彼女の方が話し相手として具合がいいと思うのだが。あと矢内さんについてはまったくの余談になるが、ある時用事があったて体育館の用具室に俺が赴いた時、矢内さんら女子生徒らが体育の実技中で、勉強は出来るが運動不得手の観のある矢内さんがちょうど前方回転をしたところだった。しかし立つて着地出来ずに、うしろにのけぞりながら大きく股を開いた形で背中からマットに着地。およそあれもない姿を、その部分を俺の目に晒すこととあいなってしまう。用事をほったらかし赤くなつてそのままUターンをした俺の背に「やーね、あの子。矢内さん、あんたあの子に見られちゃったわよ」なる他の女子生徒の声が襲った。以来俺を見る時は常

に冷笑的だった矢内さんの顔に、しばらくでも赤みがさしていたのを覚えている。

とにかく俺は彼女らが去つたあとの新河の席に置かれた花瓶の花をじつと眺め、改めて事の実相を心中で咀嚼しようとした。死んだのか、新河が……。死ぬ、この世からいなくなる事、存在しなくなる事。毎日のテレビや新聞ではそれこそ湯水のように誰かの死が伝えられ、殆ど概念的にしか理解出来なくなつていた死が今は、ここでは、肌感覚で感ぜられる。毎日顔を合わせていたクラスメートだからということもあるが、超みつともなく、またあられもなく、俺の心にとどめを刺してくれた新河だったからこそその印象が強かった。「この死は誰の死：？」と田辺さんが云つた言葉が強迫のように迫り来る。そうだ、確かにその通りだ。改めて思えば俺はいつたいなぜ、いまここにいるのだろうか？なぜここに来た：いや、呼ばれて来たのだからか？死とは何か、生とは何か、人生とは何のためにあるのだろうか、等々日頃頭の中で抽象的に問うことしかせず、実態は「死んだように」生きていた俺に、この夢のシチュエーションは余すところなく、その俺の疑問への解答を提示していた。「わかつただろう？」



誰かの声が教室の片隅から聞こえて来た。廊下側の未だ夕日の残照がさす反対の暗がりからそれは聞こえたようだ。誰かいるのか？その暗闇の一面に人型の影が凝縮したように見える。これは：新河だ！死んだ新河が亡霊となつて、いま俺の目の前に現出しようとしている！恐怖の金縛りにあつたような俺に「今ならお前の交誼の申し出に応じよう」と彼は云い、さらにフフと不気味な笑い声を立ててみせる。必死になつて俺は金縛りを脱し、次いで脱兎のごとくに教室から飛び出した。恐怖に憑かれて長い廊下を俺は走る、走る！その途中窓に目をやると今しも夕日の最後の一指しが地平に没しようとしていた。そしてこれが奇妙なのだが身は全力疾走をしているのに一方で立ち止まつて窓の外の夕日を見ている俺がいるのだった。校門を出て行こうとしている二人連れがいる。田辺さんと矢内さんだった。田辺さんが「村田くん、いっしょに帰りましょうよ」と俺に明るい声で呼び掛けてくれる。夕日の最後の一指しともども彼女らが俺にとつては希望の最後の光のように見える、思われる。俺は見栄も外聞もなく大声で「待ってくれー！俺を、置いて行かないでくれー！」と彼女らに叫ぶのだった…。

ようやく一階に降りる端の階段へと辿り着いた。背後から差し迫る恐怖にアバよつとばかり俺は一気に階段を駆け下りようとした、が…。階段は間の踊り場ともども既に闇に閉ざされていて、そこにももの凄いい恐怖が潜んでいるのが感じられた。恐らく亡霊なる新河が先廻りしてそこに居るのだろう。怖くてとても降りて行けない。逡巡する内に一階からミシリ、ミシリとばかりに足音が伝わって来た。ふり向けば背後の廊下の闇も増していて戻るなどとても不可能だ。進退窮まった俺はその場にただ立ち尽くすのみである。（続く）



【夕日の最後のひとさし。闇に閉ざされる前に！】